國學院大學学術情報リポジトリ

ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の翻訳と注釈（３）

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-04-16
	キーワード (Ja): ナシ族, ナシ語, トンバ経典, 翻訳, 注釈
	キーワード (En):
	作成者: 黒澤, 直道
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001578

ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の翻訳と注釈（３）

黒澤　直道

1. はじめに

本稿では、前号に引き続き、ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の第二十五葉から終わりまでの翻訳と注釈を示す。凡例については、前々号の第二節を参照されたい[1]。

2. 翻訳と注釈

〔第二十五葉〕

屍を見るのは烏が早かった。肉を食うのは蟻が早かった。血を飲むのは蝶が早かった。頭はドゥの悪霊が齧った。肉はツェの悪霊が食った。血は悪霊が飲んだ。骨は悪霊が齧った。ムルスズとミマサテは相談し、コの悪霊、ブの悪霊[2]のないように殺した、と。体の骨を取り出し、ガ神の角笛とした。肉と心臓を取り出し、ガ神への供物とした。ムルスズはドゥゾアルを殺し、鋭い刀で仇を探し、仇の者を探し出した。蝶が木を動かすように、木は動かされて折れた。ムルスズの心は、ひときわ喜びに咲き誇り、その由来がここに出た[3]。ムルスズが言うには、ドゥゾハパ、スミサチャの二人よ、どちらの側につきたいか、と。ドゥゾハパが言う

---

[1] 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」（基盤研究 C（18K01018）、研究代表者・山田勅之）、及び「古代チベット土着宗教儀礼説話とトンバ教説話との試験的相互比較」（挑戦的研究（萌芽）（24K21369）、研究代表者・石川厳）による研究成果の一部である。

[2] 原文は、Ku、Bbuq。いずれも舌禍の悪霊。ドゥゾアルを殺して災いの元を断ったという意味。

[3] ①では、「……スのマブトナ［Mebbvdoqnal。①ではスのトンバとする］が、仇の頭、仇の肉を切り、ガ神の供物とし、仇の血を盛って、ガ神の穢れを洗った。……スのハブロチが、ムルスズのガ神の穢れを洗った。」とし、ドゥゾアルの息子が穢れを洗ったことになっている。②でもほぼ同様であるが、「……マピュトナが、頭をガ神の座る石にした。……ムルスズのハブルゥァパは、ムルスズのガ神の穢れを洗った。」とし、やはりドゥゾアルの息子が穢れを洗っている。また、③では、「……心臓の温かい血は、スのガ神の薬となった。」とする。

には、父はドゥの種族、母はスの種族。ドゥはガ神の種族。ドゥの地へつこう、と。スミサチャが言うには、――

〔第二十六葉〕

――父はドゥの種族、母はスの種族。スもガ神の種族。スの地へつこう、と。ムルスズが言うには、ドゥゾハパ、スミサチャの二人よ、ドゥゾハパは、ドゥがガ神の種族だという。ドゥの地へつきなさい。スミサチャは、スもガ神の種族だという。スの地へつきなさい、と[4]。ムルドゥズは、ドゥゾアルが何処に行ったか分からない。一日が過ぎたようだが、一日が過ぎても帰らない。一月が過ぎたようだが、一月が過ぎても帰らない。一年が過ぎたようだが、一年が過ぎても帰らない。天と地の間も探しに行ったが見つからない。東と西に探しに行ったが見つからない。北と南に探しに行ったが見つからない。ジュヴルゥア大山の麓に探しに行ったが見つからない。ハイバダの木にところに探しに行ったが見つからない。ドゥゾハパが言うには、ドゥゾアルはスが殺した、と。スの黒い雲、黒い風に悟られないように、ドゥの白い雲と白い風が報せを持ってきた。白い雲と白い風が伝えるには、ドゥゾアルはスが殺した。頭はドゥの悪霊が齧った。肉はツェの悪霊が食った。――

〔第二十七葉〕

――骨は悪霊が齧った。血はムの悪霊が飲んだ。屍を見るのは烏が早かった。肉を食うのは蟻が早かった。血を飲むのは蝶が早かった。白い雲と白い風がドゥに報せを伝えてきた。ムルドゥズは泣いた。ツツジムは泣いた。ドゥのユシブゾ[5]は泣いた。ドゥの白い天、白い地は泣いた。白い山、白い谷は泣いた。スとルは泣いた[6]。ドゥは悲しんで心が痛み、

---

[4] この二人の子に関わるくだりは、①・②では見られない。③では、二人の子の言葉として、「ハバロブ、ハバロムが言うには、私は父の骨の種族、父はドゥの種族。ドゥが勝利し、ドゥの地に戻る、と。」とある。

[5] 原文は、Yuqsheelbbuqzzo。祭司の名前。

[6] ナシ族の世界観では、自然界の主宰者であるス（Svq）は、山、谷、川、湖……と至る所にいるとされる。また、ル（Lvq）は漢語の「龍」の借用と考えられ、スにやや近いものとして並列されている。その意味では、天地や山や谷の後にスとルが並ぶことは違和感がない

悲しんで涙が出たものだ。悲しんで涙が出るという、その由来がここに出た。ムルドゥズが言うには、ドゥの息子九人が生まれ、ドゥの娘九人が生まれたが、ドゥゾアルのように有能な者はもう一人も出るはずがない、と。一日に千人に会い、一夜に百人に会っても、ドゥゾアルのような者はもう一人も会うはずがない、と。ムルドゥズ、ツツジムの二人は、飯を与えても飯を食わず、水を与えても水を飲まなくなった。ドゥゾアルよ、ドゥの天、ドゥの地をその身に背負い、白い太陽、白い月を手に持ち、恒星の息子と、惑星の娘を手に持ち、親戚ではなく仇の籬に跳び込んだ。穀物の倉ではなく毒の倉に入り込んだのか[7]。

〔第二十八葉〕

サイワデ、ウァツホァム[8]、ムルドゥズ、ツツジム、ユシブゾの五人が相談し、有能な者でなければ殺されないものだ。悪い者でなければ誘われないものだ。ムルドゥズは、鋭い刀をスに示すのだ、と。蝶が木を動かすのだ、と。ムルドゥズの心に花が咲いたというのは、その由来がここに出た。ムルドゥズの一代、パ神の兵、サ神の兵を起こし、一千一万のガ神の兵、ウ神の兵を起こし、スの天、スの村を壊すのだ、と。スの地を壊すのだ、と。スの者、スの馬を殺すのだ、と[9]。ムルドゥズとサイワデの

が、ただしそれは現在へと至る『ドゥとスの戦い』の後の世界においてである。おそらくこの部分は、戦いの前の世界に、その後の世界観が入り込んでいるものであろう。

[7] ①では、以下の最初のフレーズはドゥゾアルを主体とし、「ドゥゾアルは、渇いても水を得られず、と。餓えても飯を得られず、と。スの天、スの地の黒土の下に、埋められたのか、と。ドゥゾアルは、顔は太陽、月のよう。手は明るい恒星、明るい惑星のようだ、と。ドゥゾアルは、親戚でなく仇の家に入っていった。麦でなく毒の水に入っていった。」とする。最後の句では、他のテクストで「家」と解釈する jjiq を、「水」と解釈している。②でもほぼ同様だが、最後の句は「穀物でない、毒の碗に落ちた」とする。③では、「……ドゥゾアルが亡くなったことで、天が地になり、地が天になる。太陽は輝かなくなる。月は白くなくなる。食べ物は得られなくなる。」とする。

[8] 原文は、Wezvlhuaqmu。サイワデの妻。

[9] ①では、「サルワデ［Saqleelweddei。一部発音が異なる］、イシブゾ、ムルドゥズ、イシヘデュ［Yiqsheelheiqddeeq。heiqddeeq は「大神」］、ミジュヘデュ［Miqjjuheiqddeeq］、チュッシヘデュ［Zhuaqsheeheiqddeeq］の六人が相談し、ドゥゾアルは、足に足枷をはめられ、手に手錠を掛けられて死んだのだ。ドゥのガ神の兵、ウ神の兵が、ムルスズを殺すのだ、と。」とする。②では、人物の名前がさらに一部異なり、サルワデ、イシブゾ、ムルドゥズ、セセカジュ［Seiseikejjeq］、マミパルゥァ［Malmiba'lua］、チュッシヘデュとなっている。③では、「ムルドゥズと、ツチュッジムは、サイワデを呼んで来て、イグオカを呼んで来て、ヘデュオパ

二人が変化して、天から白い鉄の鉱石が一つ落ちてきた。ガウァラドゥァ[10]の男が打ち、火花は鷹が飛ぶように打ち、ふいごは虎が吠えるように打ち、白い鉄の三叉槍を打ち、鋭い矛と鋭い矢を打ち、――

〔第二十九葉〕

――虎の爪の白い鎧を打ち、三本のモミの木を切り倒し、一千一万の矛の柄がここに出た。三本のツツジの大木を切り倒し、黒土の大きな鞘がここに出た。三本の竹を切り倒し、一千一万の竹の胴胸がここに出た。ドゥの白いヤクを潰し、ヤクの角を切り、一千一万の弓がここに出た。ドゥの白い鶏が変化して、燕のような矢、一千一万がここに出た。天の数多の星の如く、地上に蜂が飛ぶ如く、大刀は葉が落ちるよう。ムルドゥズの一代、ユシブゾは、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤肉、香とバターを用い、パ神、サ神、ガ神とウ神、オ神とヘ神の前に供えて祈り、スの村を壊すのだ、と。スの地を壊すのだ、と[11]。ムルスズは悪い夢を見た。スの村が火に呑まれる夢を見た。クザナムは悪い夢を見た。スの地が肥えに燻される夢を見た。スの息子、スの娘は悪い夢を見た。ドゥの白ヤクが、タラアナ山[12]で角を擦り角を研ぐのを夢を見た[13]。

〔第三十葉〕

ムルスズとミマサテは相談し、一万一千の有能なドゥの兵はまだスの地に着いてはいないが、八十一の大きな豹の砦を建てねばならない。チティグニャ[14]が砦の入り口を守り、鉄の頭の黒い犬が砦の入り口を守る。

を呼んで来て、チュゥシヘデュを呼んで来て、イシヘデュを呼んで来て、ミジュヘデュを呼んで来て、これらの大神が相談し、……」とし、ムルドゥズとツチュゥジムが、六人の神を呼んでいる。

10 原文は、Ggawelaqddua。鍛冶の名前。

11 ①では、祭祀のくだりはない。②ではツツジではなく「三本の赤いブ（bbee）の木を切り倒し、……」とする。③では、「サイワデが変化して、天の鉱石を地に投げた。Dduq の鍛冶、クチラド［Gelzheeqlaqddo］が出て、火花は鷹が跳ぶように、火の音は龍が震えるように、鉄を打つのは雷のように。……三本のブの木を切り倒し、……」とする。

12 原文は、Tallaainaqjjuq。スの地の地名という。

13 ①・②・③ではこのくだりは見られない。

14 原文は、Zheetiggvniel。スの将軍の名。

白と黒の境[15]の一つ目の坂を、炭のように黒い龍が守る。白と黒の境の二つ目の坂を、炭のように黒い虎が守る。白と黒の境の三つの目の坂で、黒い毒蛇が砦の入り口を守る。白と黒の境の四つ目の坂を、矢を射るのが上手い目の赤いツェの悪霊が守る。白と黒の境の五つ目の坂を、鉄の頭の黒い犬が守る。白と黒の境の六つ目の坂を、スの者が白石を積み上げて守る。白と黒の境の七つ目の坂を、鎧を着て刀を掛けたスの者が守る。白と黒の境の八つ目の坂で、黒い角のヤクが砦の門を守る。白と黒の境の九つ目の坂を、ドゥの悪霊の刺のような悪い風が守る[16]。水が流れる東方で、タザチブ[17]が九つの木の砦を建て[18]、炭のように黒い虎が砦の門を守る。水が流れる南方で、シジチブ[19]が九つの火の砦を建て、炭のように黒い龍が砦の門を守る。

〔第三十一葉〕

水が流れる西方で、レチスブ[20]が九つの鉄の砦を建て、胸の白い黒熊が砦の門を守る。水が流れる北方で、ヌズチブ[21]が九つの水の砦を建て、前足の白い黒い犬が砦の門を守る。四つの鉄の門に、四つの有能な悪霊が、砦の門を守った。ムルドゥズの一代、一千一万のパ神の兵、サ神の兵、ガ神の兵、ウ神の兵、オ神の兵、ヘ神の兵は、この地に至ることができな

---

15 原文は、dvzheeq。④・⑤では、「（白と黒を分ける）境い目」の意味とする。dvzheeq には他に「判官」の意味があるが（和学光 2013,p.327）、前号注 29 で解釈の分かれていた語も dvzheeq であり、何らかの関連がある可能性がある。

16 ①では、「一世一代が過ぎ、スのミマセテ、クザナム、クトゥラユ、ナジツォブは相談し……、スの兵が駐屯する八十一の砦を建てた。……七つ目の坂は、鋭い刀の赤い体の者が守る。八つ目の坂は、ヤクの黒い角のような烏が守る。九つ目の坂は、黒い風が守る。」とする。このうち、④・⑤で、「豹」と解釈する rhee については、「駐屯する」と解釈している。②では、rheewe を一語として「堡塁」とする。③では、「ムルスズは、ガジツォブとクトゥタユとの三人は相談し、……九十九の坂を作らねば、と。……四つ目の坂は、汚れた大蛙が守る。……七つ目の坂は、黒竹の刺を挿して守る。八つ目の坂は、ヤクの長い角で守る。九つ目の坂は、ドゥの悪霊の黒い風が守る。」とする。

17 原文は、Derssaqjilbbv。東方の悪霊の王。

18 五行の木、火、金、水が、それぞれ東、南、西、北に配列される。漢族の五行概念と同じ。

19 原文は、Sheeqrheejilbbv。南方の悪霊の王。

20 原文は、Leiljisheepv。西方の悪霊の王。

21 原文は、Neeqrheejilbbv。北方の悪霊の王。

い。鹿の頭の髑髏で九つの砦を建て、鹿の頭が生えたタの悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。牛の頭の髑髏で九つの砦を建て、牛の頭が生えたトゥ[22]の悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。羊の頭の髑髏で九つの砦を建て、羊の頭が生えたムの悪霊とグの悪霊[23]が、蜂が飛ぶような矢で遮る。ズの頭の髑髏で九つの砦を建て、ズの頭が生えたブ[24]の悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。山羊の頭の髑髏で九つの砦を建て、山羊の頭が生えたツェの悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。

〔第三十二葉〕

ヤクの頭の髑髏で九つの砦を建て、ヤクの頭が生えたドゥの悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。犬の頭の髑髏で九つの砦を建て、犬の頭が生えたアの悪霊[25]が、蜂が飛ぶような矢で遮る。鶏の頭の髑髏で九つの砦を建て、鶏の頭が生えたタラ[26]の悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。魚の頭の髑髏で九つの砦を建て、魚の頭が生えたスの悪霊が、蜂が飛ぶような矢で遮る。蛙の頭の髑髏で九つの砦を建て、蛙の頭が生えたチャの悪霊[27]が、蜂が飛ぶような矢で遮る[28]。スの角が生えた山羊が最も早かった。砦の先は山羊が守る。爪が生えた犬が最も早かった。砦の真ん中は犬が守る。鰭の生えた魚が最も早かった。砦の末は魚が守る。砦の前には黒い雲、黒い風が棲み、砦の下には銅の刺、鉄の刺を挿し、毒の黒い湖を造る。左はヤクが守り、右は虎が守る[29]。ムルドゥズの一代、一千一万の有

---

22 原文は、Tv。悪霊の一つ。
23 原文は、Mu と Eeq。水怪と女の水怪。
24 原文は、Bbee。跡継ぎの無い悪霊。
25 原文は、Aceeq。舌禍の悪霊。
26 原文は、Talla。Tillo（夭折の悪霊）と同じと思われる。
27 原文は Chel。chel は「穢れ」の意味。
28 ①では、「最初、タの悪霊の頭に鹿の頭が生え、鹿の乾いた頭（髑髏）で九つの砦を建て守る。ドゥの悪霊の頭に牛の頭が生え、牛の乾いた頭（髑髏）で九つの砦を建て守る。……」とし、以下、チ［Jil］の悪霊と馬、ムの悪霊と羊、ツェの悪霊と山羊、ドゥの悪霊とズ、ブの悪霊とヤク、オ［アと同じ］の悪霊と犬、ティロ［タラと同じ］の悪霊と魚、チャの悪霊と蛙、ミ（火）の悪霊と蛇の組み合わせで述べられる。②もほぼ同様だが、組み合わせには差異がある。
29 ①では、「ムルスズは、ニチクの砦を建て、銅の刺、鉄の刺を砦の周りに挿し、毒の矢を周りに回らした。角の生えた痩せた山羊が砦の前を見張り、牙の生えた痩せた犬が見張り、鰭の生えた痩せた魚が砦の下を守る。」とする。ここで「痩せた」と解釈される julzza は、他

能な兵は、ここに着くことができない。スの砦は堅牢で壊せない。スの地は堅牢で壊せない。ムルスズの、飛べる者は飛んできた。跳べる者は跳んできた。――

〔第三十三葉〕

――スの有能な兵を起こした。ドゥの天の下の、一千八百の兵はスに分けられた。最も早くにドゥが持っていた白い石も、地の末の黒い石に変わった。ドゥの新しい村は、スに取られた。地の末の白石も、スに取られたのだ。ドゥが建てた砦は、スの鉄の砦に変わった。ムルドゥズとサイワデの二人は二人は相談し、仇の砦を壊そう、仇の地を壊すのだ、と[30]。ユシブゾは、緑のコノテガシワの祭壇に、白い毛氈（もうせん）を祭壇に敷き、白い

のテクストでは julchuq（最初）と解釈されている。②では後半に違いがあり、「……ムルスズのニチクの砦の辺り、毒の湖、刺［原文は ddaq。③では「氷」と解釈する］の湖を引き、銅の刺、鉄の刺を挿し、黒い雲、黒い風が砦の先を覆い、角の生えた最も痩せた山羊が砦の先を見張り［julzza を「最痩」とする］、……ムルスズの右の黒い門は、炭のような黒い虎が守り、左の門は炭のような黒いヤクが守る。ムルスズのスの悪霊、飛べる者、跳べる者、一千一万が守る。スの砦、東の門は、サチグル［木・チの悪霊・九・(人)］が、サ［Ser］の九つの砦を建て、タザジブと炭のような黒い虎が門を守った。その地で、（ドゥが）兵を起こし仇を探しに来させない。飯や水を探しに来させない。スの南の門は、九つの火の砦を建て、シジジュブ、ミツグル［火・悪霊・九・(人)］、炭のように黒い角の折れた龍が守った。スの西の方は、九つのスの砦を建て、スプジュブ、シュツグク［鉄・悪霊・九・(人)］が守った。北は、九つの水の砦を建て、ノジジュブ、ジツグル［水・悪霊・九・(人)］が守った。」とする。③は、「スのニツェクゴの砦、角が生えた者では羊が最も痩せている。羊に砦の前を見張らせる。」とし、以下、犬、魚と続く。

[30] ①はやや異なるテクストであり、これまでとは別の代のように述べられている。「ある一代、ムルドゥズは、白い天、白い地に住み、ムルスズは、黒い天、黒い地に住む。ある一代、最も早くに、ムルドゥズの一代は、白い石を地に立て住み、ムルスズは、黒い石を立てて、ドゥの白い石を立てた場所にスが住もう、と。ドゥの黄金の家にスが住もう、と。ムルドゥズは、白い石を地の先に立てて住み、ムルスズは、黒い石を地の末に立てて住む。スの鉄の家をドゥが持とう、と。ムルドゥズは、足の速い若者を遣わして、ユシブゾのトンバ［原文はピュビュ（biubbiuq）。トンバ（dobbaq）はチベット語由来の語であり、経典には固有のナシ語が見られる。］を呼んだ。」とする。②は①と似るが、互いの境界を侵犯したことが書かれていない。③は、白黒の境界線に石を立てて印をつけたという説明がある。「ムルドゥズは、白い天、白い地に住み、ムルスズは、黒い天、黒い地に住む。ドゥとスの間は、白と黒と境の地、地の先には白い石を立て、ドゥの印とした。地の末には黒い石を立て、スの印とした。ドゥとスの両家は、互いに大きな仇となった。白と黒は交わらず、飛ぶ鳥も行き来せず。ドゥの白い石を立てたところに、スが住むという。ドゥの大きな黄金の家に、スが住むという。スの黒い石を立てたところを、ドゥが持つという。大きなスの鉄の家を、ドゥが持つという。」とする。

米の供物を撒き、金銀とトルコ石、黒水晶を供え、九種の木を伐って、手を広げた人形を作り、百種の穀物を搗いて、麦の人形を作り、トの悪霊とドの悪霊を捨てる、と。九つのスの悪霊を、悪霊の場所に捨てるのだ、と。ドゥのユシブゾが、――

〔第三十四葉〕

――白い松のチ[31]の悪霊の門を下に立て、山羊の肉、豚の肉、悪霊に匂うものを焼き、仇の魂を呼んで殺そう、と[32]。手を広げた人形、九つの仇の魂を、仇の地に捨てる。黒い鶴、黒い鷹のように、黒い豹、黒い虎のように、黒い熊、黒い豚のように、角の折れた黒い鹿のように、仇の地に捨てなさい、と。主人の一家、音は軽く耳は安らかに。寿命は長く日が続き、病なく痛みなく[33]。これらが出た、と[34]。ムルドゥズの一代、ムルドゥズ、

---

[31] 原文は、Jil。舌禍の悪霊。多くの場合、同じく舌禍の悪霊である Qiq と対になって語られる。

[32] この一句は漢語訳がない。

[33] この言葉は、本来、経典の最後に唱えられる締めの言葉である。

[34] ①は描写がさらに詳しい。「白いヤクの毛氈を祭壇に敷き、白い犂の塔を立て、金銀、トルコ石、黒水晶を神に捧げ、ムルドゥズ、ツチュゥジムの身代わりの牛を置き、山の九種の木を伐って、跳ぶことのできる木の人形を父の身代わりとし、話したり笑ったりできる麦の人形を作り、九つの乾いた頭、乾いた角で、九種の家畜の身代わりとし、トの悪霊とドの悪霊を、下に削る。昼はトの悪霊を置き、夜はトの悪霊を捨て、仇のムルスズを下に捨てる。トンバのイシブゾは、白い松の門を立て、白い松はシロの死［jilloq sheel に当てられた逐語訳だが全文訳にはない。ここは「チの悪霊の門の横木を架ける」とする他のテクストの解釈が妥当である。cf.李霖燦・張琨・和才 1978,p.25］、松の葉を仇の魂にして、ツツジの葉を仇の舌にして、山羊の肉を焼いて仇に匂いを嗅がせ、豚の干し肉を焼いて仇に匂いを嗅がせ、スの魂を招き、白と黒の接する境の地に、スの魂を堅牢な洞の底に圧する。」とする。②は「……ムルドゥズの身代わりの牛を置き、山で良い九種の木を伐って、木の人形を作り、跳んだり踊ったりできるようにして、骨を傷めた父の身代わりとして置いた。百種の穀物を集め、麦の人形を作り、話したり笑ったりできるようにして、肉を痛めた母の身代わりとして置いた。九つの乾いた頭、乾いた角を集め、啼いたり吠えたりできるようにして、九種の家畜の身代わりとして置く。……イシブゾは、白い松の門を立て、白い松の横木を架けて、松の葉を仇の魂として、山羊の肉、豚の肉と骨を焼く。ムルスズの魂を招き、招いてここに着かせた。仇の地の洞の下に圧した。」とする。③は、「白いヤクの毛氈を祭壇に敷き、白い犂の塔を建て、金銀、トルコ石、黒水晶を神に捧げた。雌の黄牛で身代わりとした。山の九種の木の幹を切り、木の人形を跳べるようにし、倉の清らかな小麦五種を掴み、麦の人形を笑えるようにした。木の人形を男［sso。父とは書かれていない］の身代わりとして置き、麦の人形を女［mil］の身代わりとして置く。九つの乾いた頭、乾いた角で、九種の家畜の身代わりとして置く。昼にはトの悪霊を置き、夜にはトの悪霊を捨てる。ムルスズを仇の地に追い出す。トンバのイシオゾが、白い松で松の門を立て、白い松で横木を架け、松の葉を仇の魂

サイワデ、ユシブゾの三人は相談し、ユマ[35]でなければ、スの砦を壊せない。スの地を壊せない、と[36]。

〔第三十五葉〕

神の白い蝙蝠は、大鵬の白馬に乗り、ラブラサゾ[37]は、獰猛な虎の白馬に乗り、三百六十のユマに助けを乞う。翼のあるユマ、模様のあるユマ、蹄のあるユマに助けを乞う。三百六十のユマが降りて来た。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターを、三百六十のユマの前に供える。ムルドゥズの一代、パ神の兵、サ神の兵を起こし、ガ神の兵、ウ神の兵を起こし、――

〔第三十六葉〕

オ神の兵、ヘ神の兵を起こし、三百六十のユマを後ろに率い、鶏の頭の白い猿[38]は、白い鉄の鋭い斧を持ち、一千一万の有能な兵を後ろに率い、九つの大きな坂を下りて行った。九本の大樹の辺りを下りて行った。九本の大河の畔を下りて行った。黒い鳥が越える峯間の谷、旅人が越える峯間の谷から下りて行った。こうしてこの土地に下り着いた[39]。ムルドゥ

とし、ツツジの葉を仇の舌として、山羊の肉を焼いて仇に匂いを嗅がせ、豚の干肉を焼いて仇に匂いを嗅がせ、ムルスズの魂を、白と黒の接する境の地の、黒土の洞の下に圧する。」とする。

35 原文は、Yemaq。戦いの神。

36 ①・②・③には、④・⑤にはない敵地を偵察させるくだりが見られる。①では、「白い猿、白い狐に悪霊の地を見に行かせ、蝙蝠と大鵬に毒の地を見に行かせ、白い牛と白い馬にツェの悪霊の地を見に行かせ、蜜蜂と蝶にムの悪霊の地を見に行かせた。(すると彼らが言うに、)一千一万のスの兵は、八十一の豹の砦を建てたのだ、と。ムルドゥズは心穏やかでなく、ユマでなければ、仇の砦を壊せない、仇の地を削れない。スの砦を壊し、スの地を削るのだ、と言った。」とし、上巻はここで終了する。②でもほぼ同様のくだりがあり、ここで終了する。③もほぼ同様である。

37 原文は、Labbvlasaqsso。使者の名。

38 原文は、Yuqperq'aiqgvzzeeq。戦いの神。

39 ①の下巻の冒頭では、ユマの由来が述べられる。この部分は④・⑤にはない。「……天のサイワデとウァチャホムの二人は変化して、白い毛の天幕の下に、白い卵が一つ出た。サイワデが三夜温めたが、卵が孵ることはなく、ウァチャホムが三夜温めたが、卵が孵ることはなく、太陽と月が三夜温めたが、卵が孵ることはなく、神の天の下、天の龍が三夜温めたが、卵が孵ることはなく、ハイバダの木の上で、大鵬が三夜温めたが、卵が孵ることはなく、白い法螺貝の高い峰で、腹の白い獅子が三夜温めたが、卵が孵ることはなく、……［蛇の神、虎、狼が温めるが卵は孵らない］……ムルダジの湖の中で、この一つの白い卵は、チョシナ

ズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターを、三百六十のユマに供える。ユマの心と気が変化して、虎に乗ったユマが降りて来て、ヤクの頭が生えたドゥの悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。

〔第三十七葉〕

ドゥの有能な兵は揺るがなかった。そうしてこの地に降り着いた。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、狼に乗ったユマが降りて来て、山羊の頭が生えたツェの悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。そうしてこの地に降り着いた。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、虎に乗ったユマが降りて来て、馬の頭が生えたチの悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。ドゥの有能な兵は揺るがなかった。そうしてこの地に降り着いた。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、

——

プ［Chulsinabvq。大きな亀］が温め、その鋭い爪で少し掻くと、卵の殻と卵の汁の二つに割れた。光明のユマの頭が生まれ出た。それはパウユマと名付けられた。サイワデが三夜温めたので、彼をユマの父と言った。ウァチャホムが三夜温めたので、ユマの母がここに出た。太陽と月が三夜温めたので、太陽の顔があるユマがここに出た。月が三夜温めたので、月の紋があるユマがここに出た。ムルダジの湖の中で、天の龍が三夜温めたので、天の龍の頭があるユマがここに出た。白い法螺貝の高い峰で、獅子が三夜温めたので、獅子の頭があるユマがここに出た。ハイバダの木の上で、腹の白い大鵬が三夜温めたので、大鵬の翼があるユマがここに出た。……」とし、さらに様々なユマが生まれる。③でもユマの由来が述べられ、さらにトァカの由来も述べられる。「……ユマが出ると、トァカも出た。……白い法螺貝の高い山に、トァカの祖父が出た。黒水晶の大きな湖で、トァカの祖母が出た。黄金の高い山で、トゥカの祖父が出た。トルコ石色の緑の湖で、トァカの祖母が出た。タチャヘイという、トァカの父が出た。タザチュニマという、トァカの母が出た。ユラディドァという、トァカの父が出た。ミチャロムという、トァカの母が出た。これら八人が変化して、トァカの息子も九人出た。娘も九人出た。トァカのその長男は、プデュダカと名付けた。九か月と十三日、その日になって、トルコ石色の龍が杭を打つ。ムルダジの湖の中に打つと、五種の五行がここに出た。五種の五行が変化して、サパジブ、サバジムがここに出た。かれら二人、高い崖に鑿で穿つ、伴侶に出会う［鑿の発音 zzv と伴侶の発音 zzvq が通じる。ナシ族の民謡に見られるツェジュと呼ばれる技巧］。それら二人が変化して、三百六十のトァカがここに出た。……」とし、さらに様々なトァカの出現が述べられる。

〔第三十八葉〕

――酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、狼に乗ったユマが降りて来て、羊の頭が生えたムの悪霊、ウの悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。そうしてこの地に降り着いた。蛇の頭の生えた火の悪霊が守った。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、黄金の孔雀に乗ったユマが降りて来て、蛇の頭が生えた火の悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。そうしてこの地に降り着いた。蛙の頭の生えた穢れの悪霊が守った。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、蛇に乗ったユマが降りて来て、蛙の頭が生えた穢れの悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。

〔第三十九葉〕

そうしてこの地に降り着いた。水の流れる東、タザチブが木の九つの砦を建て、炭のように黒い虎が砦を守る。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、虎に乗ったユマが降りて来て、木の九つの砦を壊し、木の九つの地を壊し、タザチブを殺し、九つの木の悪霊を殺し、炭のように黒い虎を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。水の流れる南、シジチブが火の九つの砦を建て、炭のように黒い龍が砦を守る。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、――

〔第四十葉〕

――龍に乗ったユマが降りて来て、火の九つの砦を壊し、火の九つの地を壊し、シジチブを殺し、九つの火の悪霊を殺し、炭のように黒い龍を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。水の流れる西、レチスプが鉄の九つの砦を建て、胸の白い黒い熊が砦を守る。ムルドゥズの

一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、熊に乗ったユマが降りて来て、鉄の九つの砦を壊し、鉄の九つの地を壊し、レチスプを殺し、九つの鉄の悪霊を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。水の流れる北、ヌズチブが水の九つの砦を建て、白い鬣（たてがみ）の馬[40]が砦を見張る。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。――

〔第四十一葉〕

――ユマの心と気が変化して、虎に乗ったユマが降りて来て、水の九つの砦を壊し、水の九つの地を壊し、ヌズチブを殺し、九つの水の悪霊を殺し、白い鬣の馬を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。天と地の間に、九つの土の砦を建てた。角が生えた山羊が最も早かった。砦の先は山羊が守る。爪が生えた犬が最も早かった。砦の真ん中は犬が守る。鰭の生えた魚が最も早かった。砦の末は魚が守る。ムルドゥズの一代、ヤクと羊、酒と飯、干肉と赤身の肉、香とバターをユマに供える。ユマの心と気が変化して、千百のユマが降りて来て、九つの土の砦を壊し、九つの土の地を壊し、角が生えた山羊を殺し、爪が生えた犬を殺し、鰭の生えた魚を殺し、ミマサテを殺し、クザナムを殺し、――

〔第四十二葉〕

――クトゥタユを殺し、ナチツォブを殺し、ナイセトゥを殺した。ムルスズの地、一千一万のスの者を殺した。鎧を破り刀を折り、鉄を破り矛を折った。一千一万の仇を殺した[41]。　ムルドゥズの一代、仇の角を切

---

40 原文は juq。野生の馬。

41 ①では、「昔々、天の下、パ神の力、サ神の力を借り、ガ神の力、ウ神の力、オ神の力、ヘ神の力を借り、ドゥ神［男性神］の力、セ神［女性神］の力を借り、三百六十のトァカとユマの力を借り、ユマでなければ、スの九つの黒い坂を破れない。ムルドゥズの一代、イシイブの口から出た薬を、ユマに供える。上から白い腹の獅子が降りて来て、スの炭のように黒い龍を呑んで殺し、一つ目の黒い坂を破った。……［以下同様に九つの坂を破る］……九つの黒い砦を破った後に、ドゥのパ神の兵、サ神の兵と、ガ神の兵、ウ神の兵、オ神の兵、ヘ神の兵は、三百六十のトァカ、ユマを後ろに率い、そうしてある南の地に着いた。スの鹿の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る鹿の頭の生えたタの悪霊を殺し、牛の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る牛の頭の生えたトゥの悪霊を殺し、馬の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る馬の

り、ガ神の角笛にし、仇の心臓を取り出し、ガ神の供物とし、仇の血を取り出し、ガ神の穢れを血で洗う。ムルドゥズの一代、鋭い刀は仇を見つけた。蝶は木を動かした。ムルドゥズの一代、心は穏やかに花が咲いたよう。ムルドゥズの一代、音は軽く、耳は安らかに。水は流れ池に満ち、寿命は長く、日々は長くあるように。未年の八月に書いたものだ。寿南村のトンバが書いた物語だ。合わせて四冊に書いた。祭司の寿命は長く、占師の日は長くあるように[42]。［完］

頭の生えたチの悪霊を殺し、そうして羊の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る羊の頭の生えたムの悪霊を殺し、山羊の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る山羊の頭の生えたツェの悪霊を殺し、ヤクの髑髏の九つの砦を破り、砦を守るヤクの頭の生えたドゥの悪霊を殺し、犬の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る犬の頭の生えたオの悪霊を殺し、鶏の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る鶏の頭の生えたティロの悪霊を殺し、そうして魚の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る魚の頭の生えたスの悪霊を殺し、蛙の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る蛙の頭の生えたチャの悪霊を殺し、蛇の髑髏の九つの砦を破り、砦を守る蛇の頭の生えた火の悪霊を殺し、スの魚、山羊、犬の頭の砦を破り、砦の下の二つの黒い湖に穴をあけ、銅の刺、鉄の刺を折り、雲の家、風の家を壊し、砦の先を守る角の生えた痩せた山羊を斬って殺した。砦の真ん中を守る牙の生えた痩せた犬を殺し、砦の末を守る鰭の生えた痩せた魚を殺し、左の門を守る黒いヤクを矛で刺して殺し、右の門を守る黒い虎を弓で射って殺し、砦を守る飛べるスの息子の翼を切り、跳べる者の足を切り、一千一万のスの悪霊を殺した。それでもまだ破りきれない仇の砦が残った。」とし、以下同様に、東・西・南・北・中央の砦を破り、スの勢力を殲滅する。一方、③では、また異なる描写の仕方が見られる。「ムルドゥズとサイワデは相談し、ドゥの兵、神の兵を起こす時が来た。三百六十のトァカとユマが兵を起こし、百千の大鵬と大鷹が兵を起こし、百千の白鶴、白鷹が兵を起こし、百千の獰猛な豹と、獰猛な虎が兵を起こし、百千の白いズ、白いヤクが兵を起こし、百千の飛べる神、跳べる神が兵を起こした。ドゥの兵、神の兵の隊列は、ガ神の旗を手に持ち、鋭い刀と鋭い矛を手に持ち、白い鉄の三叉槍を手に持ち、弓矢を手に持って、スの地にドゥの兵を起こす。仇の地に神の兵を起こす。一つ目の黒い小山では、炭のように黒い龍がその門を守り、ドゥの兵、神の兵を近づけない。ユマの心が変化して、白い法螺貝の獅子が一頭飛び出して、門を守る炭のように黒い龍を殺した。……［以下同様に、九つの門を破る。］……ドゥの兵、神の兵は降りて来て、九つの黒い小山を越え、九つの黒い川を渡り、九つの黒い森を横切った。鹿の頭が生えたタの悪霊が、鹿の頭の髑髏で九つの砦を築き、鹿がびゅんと矢を射って、ドゥの兵、神の兵を近づけない。ユマの心が変化して、黄金の黄色い虎に乗った将官が一人降りて来て、九つのタの砦を壊す。鹿の頭が生えたタの悪霊を殺し、黒い弓、黒い矛を折り、黒い鎧、黒い兜を壊し、火が着いて、それを水で消す。……」とし、以下同様に、トゥの悪霊、チの悪霊、ムの悪霊、ツェの悪霊、ドゥの悪霊、ブの悪霊、オの悪霊、ティロの悪霊、スの悪霊、穢れの悪霊、火の悪霊が守る砦を破り、東、南、西、北の門を破り、スの九層の砦を打ち壊してスの勢力を殲滅する。

[42] ①では、「ムルスズの心臓を取り出し、肺を取り出し、肝を取り出し、胆を取り出し、脾を取り出し、胃を取り出し、スの頭をガ神に供え、血でガ神の穢れを洗う。骨をガ神の角笛にする。スの皮をユマの敷物にして座る。白黒の接する境の地、ドゥの地とスの地は分けられた。ドゥ［の領域］は白い石の地の先とした。ス［の領域］は黒い石の地の末とした。」とし、さらにドゥの領域へ帰還するくだりが続く。「ドゥのパ神の兵、サ神の兵、ガ神の兵、ウ

3. おわりに

本稿では、ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の第二十五葉から終わりまでの翻訳と注釈を示した。本稿及び前号、前々号に見たように、一つのトンバ経典には複数の異なるバージョンがあることが普通であり、それぞれのテクストは複雑に入り組んでいる。そこにはトンバ文字の差異はもちろんのこと、ナシ語の読音の差異もあり、また、読経者と翻訳者による解釈の差異も存在する。さらに、経典のナシ語には日常のナシ語には見られない言葉遣いが見られるため、日常のナシ語の理解を基礎として、経典の独特のナシ語について考察する必要がある。

［参考文献］

Rock, Joseph. F. 1963. *A Na-khi English Encyclopedic Dictionary, Part I.* (Serie Orientale Roma 28). Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Rock, Joseph. F. 1972. *A Na-khi English Encyclopedic Dictionary, Part II. Gods, Priests, Ceremonies, Stars, Geographical Names.* (Serie Orientale Roma 28). Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

和発源・習煜華・王世英・和力民選編 1983『東巴経書専有名詞選』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室、1983 年 7 月。

和潔珍編訳 2009『納西諺語集』雲南民族出版社。

神の兵と、オ神の兵、ヘ神の兵の全てと、三百六十のトァカ、ユマは、スの地には残らず上ってきた。ムルドゥズの地について後、トルコ石色の天の龍の将官も、炭のように黒い龍の地に留まらず上に連れて来た。腹の白い大鵬の将官も、炭のように黒い鶏の鳴く地に留まらず上に連れて来た。腹の白い獅子の将官も、炭のように黒い虎の住む地に留まらず上に連れて来た。バデュ［不詳］の赤虎の将官も、目の広い女狐が泣く地に留まらず上に連れて来た。黄金の象の将官も、蹄の黒い馬が鳴く地に留まらず上に連れて来た。一千一万の天の兵も、火の地、穢れの地に留まらず上に連れて来た。全てのトァカの兵は、赤い炎の堡塁の中に住んだ。全てのユマの兵は、犂を鋳る赤い火の堡塁の中に住んだ。ムルドゥズの一代、トの悪霊とド［Ddoq］の悪霊を圧して、ユシブゾはこのように祈願し、ムルドゥズの一代、家畜と穀物［原文は neeq と oq。漢語訳では「子孫と福禄」とするが、本来は「家畜と穀物」の意味であろう］は豊かに栄えた。」とする。この後には、この経典が使われた特定の儀礼についての文言が続く。また、③でも、ムルスズの体をガ神への供え物とするくだりの後に、やや表現が異なるものの、スの地から帰還するくだりが続く。

和開祥釈読・李英翻訳 1999-2000「除穢・董術争戦」『納西東巴古籍訳注全集 第 41 巻』雲南人民出版社。
和正才講述・李即善翻訳 1963『懂述戦争（巻上）』麗江県文化館印、1963 年 11 月 10 日。
和芳講述・李即善・周汝誠訳 1964『懂述戦争（巻下）』麗江県文化館印、1964 年 7 月 20 日。
和雲彩読経・和明信翻訳 1984『替身道場 董神与術神戦争之経』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室。
和雲章釈読・和品正翻訳 1999-2000「退送是非災禍・董争述闘」『納西東巴古籍訳注全集 第 36 巻』雲南人民出版社。
和学光 2013『納西語漢語詞典（試用）』麗江市納西文化伝習協会。
和志武 1987『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ《納西東巴経之三》白黒争戦』雲南民族出版社。
和志武編訳 1983『納西東巴経選訳』雲南省社会科学院東巴文化研究室。
和志武翻訳 1994『東巴経典選訳』雲南人民出版社。
和志武・銭安靖・蔡家麒 2000『中国各民族原始宗教資料集成：納西族巻・羌族巻・独龍族巻・傈僳族巻・怒族巻』中国社会科学出版社。
和鐘華・楊世光主編 1992『納西族文学史』四川民族出版社。
和士成解読・和力民翻訳 1989「董術戦争」『納西東巴古籍訳注（三）』雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編（雲南省少数民族古籍訳叢 第 26 輯）雲南民族出版社。
和士成釈読・和力民翻訳 1999-2000「禳埁鬼儀式・董術戦争」『納西東巴古籍訳注全集 第 25 巻』雲南人民出版社。
李霖燦 1972 『麽些象形文字・標音文字字典』文史哲出版社（台北）。
李霖燦・張琨・和才 1978『麽些経典譯註九種』国立編譯館中華叢書編審委員会（台北）。